

# 22J-am10S

## 中高年慢性疾患患者における服薬の生活化プロセスに関する質的研究

○立矢 由佳<sup>1</sup>, 佐藤 宏樹<sup>2</sup>, 三木 晶子<sup>2</sup>, 堀 里子<sup>3</sup>, 澤田 康文<sup>2</sup> (1東大薬, 2東大院薬, 3慶應大薬)

〔目的〕慢性疾患患者の服薬継続率を高めるためには、患者が服薬を食事や歯磨きのように生活の一部にすること（服薬の生活化）が重要である。本研究では、慢性疾患患者の服薬の生活化プロセスを明らかにすることを目的とした。また、患者の服薬の生活化プロセスへの薬剤師の寄与と課題を明らかにすることで、より良い服薬指導に貢献することを目指した。

〔方法〕東京都内の1薬局において継続的に投薬されている患者を対象に、担当薬剤師と共に薬の保管・使用状況を観察しながら、インタビューを行った。インタビューによる語りはM-GTAを用いて分析した。分析焦点者は「中高年慢性疾患患者」、分析テーマは「服薬の生活化プロセス」とした。さらに、分析結果をもとに、薬剤師にインタビューを実施し、服薬の生活化プロセスへの薬剤師の寄与を検討した。

〔結果〕10名の中高年患者を対象に居宅及び薬局にて調査を行った。分析の結果、13の<概念>より、7つの【カテゴリ】を生成した。患者は、服薬意識及び服薬行動に関するプロセスを経て、生活の中心である自宅において服薬を生活化していた。その中で、患者は、服薬を生活に溶け込ませるために、薬箱等のツールを使用し<服用薬を整理する>、朝服用の薬を<朝食とセット>と捉える、薬等を生活導線上に配置し<視界に入れる>、殻を残し<服薬済の証拠を残す>等の【知恵を絞った服薬を実践】していた。しかし、薬剤師へのインタビューから、その取組みを薬剤師は把握していなかったことが明らかとなった。

〔考察〕より効果的な服薬指導を行うためには、患者の服薬の生活化プロセスの服薬意識及び服薬行動の両者へ、薬剤師は能動的に働きかける必要がある。特に、個々の患者宅に埋もれた服薬の知恵を聴き取り、別の患者の服薬指導に応用する「患者に学び、それを活かす」という姿勢が重要であると考えられる。